

宮川・北沢 三の沢

1986年6月1日
L

尾根上でひと休みしたあと、12:30北沢の下降にかかる。すぐ沢の形態をとるが、木はない。急傾斜の沢床には小石が積み重なり、まるで砂利山を下山している感じである。そのうち花崗岩に変わるから滝も期待できるだろうと話ながら進む。

傾斜がゆるやかになってようやく水の流れが出てきた。そして小滝を越えると、左手から沢が合流した。下降してきた沢(六の沢・仮称)の方は支流で、ここで合流している沢が本流のようである。

本流と合流したあと、滝が2つ連続してかかる。いずれもクライミングダウン。源頭は平凡であったが、このぶんでは先が期待できるかもと考えていたら、この先はまた平凡となってしまった。

南沢が稜線近くまで花崗岩質であったのに、この北沢はなかなか岩質が変わらない。四の沢(仮称)出合の少し下流まできて、ようやく花崗岩質の沢となった。

沢の岩質が花崗岩質になるとともに、沢にはナメや小滝が出てきた。しかし、三の沢出合手前のチョック滝のクライミングダウンにちよっと苦勞しただけで、あとは下降に特に困難な所は出ない。

そうこうしているうちに踏跡が出てきた。沢にそって続き、沢を見透かすことができるので、しばらくそれをたどって時間かせぎすることにする。

やがて一の沢(仮称)出合。踏跡はここから山腹を登ってゆくの、再び沢筋に戻る。すぐに5mの滝。くの字状になって落ちているが、楽に下降できる。その先は、兩岸が切り立ち、ゴルジュとなった。これが意外と長く続く。10分程歩いてようやくゴルジュ終了。「滝がありさえすればなあ」と、ため息をつきたくなる所である。

ゴルジュが終了すると、南沢との出合はすぐであった。

(記・

[タイム] 大笹山北方稜線(12:20, 12:30)→本流出合(12:55)→二の沢出合(13:50)→南沢出合(14:20)

